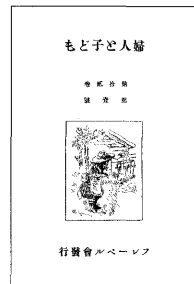


〈啓蒙誌〉の時代と

その使命

首藤美香子



『婦人と子ども』
(第12巻第1号) 1912年
倉橋惣三が編集主幹となる。

「育児主体」としての

母親の育成

東京女子師範学校附属幼稚園が開設されて二十五
年後の一九〇一年に創刊された『婦人と子ども』

は、〈発刊の辞〉のとおり、「児童教育法の研究」、
「母としての婦人教育の普及」、「家庭への読書材料
の供給」を目的としていた。一九二三年に『幼児の
教育』へと誌名が変更されたが、出発点より、「保
育研究者・実践家」と「家庭の母親」の二対象への
「啓蒙誌」としての役割を担ってきた。

特に、『婦人と子ども』の時代は、創刊号が日本

画家荒木十畝の表紙絵と高嶺秀夫の題字で格调高く
飾られたように、近代国家建設を支える知性と品格
ある女性の育成に主眼が置かれた。〈家庭論〉、〈育
児学入門〉、〈子守相談〉、〈賢母賢夫人の伝記〉、そ
して〈料理・裁縫・礼節作法・和歌俳句・読書〉に
関する記事などは、新時代にふさわしい人間形成の
指針を明示し、豊かで文化的な生活を志向する女性
の自意識をくすぐり、愛情と教養にあふれる近代の
理想の母親像を提示してきた。つまり、『幼児の教
育』は、「育児主体」としての母親を育成しようと

する啓蒙誌の一つの典型であったといえよう。

学術知による

幼児教育実験の拠点構築

一方同誌は、当初より、新教育主義者が幼稚園という新しい制度の意義を社会に訴えるための媒体とされ、学術知による教育実験を試行する専門家集団の拠点ともなった。また誌上では、〈家庭と幼稚園の関係〉、〈小学校教育と幼児教育との相違〉、〈教育としての遊戯の可能性〉、〈課業指導の是非〉、〈子どもと発達と教育の質の評価〉、〈子育ての社会化と幼保一元化〉などをめぐり、今日もなお模索が続く課題についての極めて質の高い議論が展開されている。『幼児の教育』は、近代日本の幼児教育のたどった試行錯誤の軌跡を確認でき今日への教訓とすることができる、第一級の資料的価値をもつものとなっている。

カリスマ指導者の登場と教員養成

倉橋惣三が編集主幹となるのは、一九一二年の第十二巻からである。「幼稚園保育及設備規程」の制定（一九一九）、「小学校令施行規則」の制定（一九〇〇）、そして「幼稚園令」公布（一九二五）と制度整備が進み、幼稚園数は一九一六年の六六五から十年後には倍近い一〇六六にまで増加する。幼稚園が認知され始め、確かな教員養成が求められる中、女性中心の幼児教育界を牽引するカリスマ男性指導者として、倉橋が登場する。たとえば第十二巻から始まる「森の幼稚園」は、倉橋が幼児教育にかける夢を語った情趣あふれる美文だが、みずみずしく輝く生まれたての朝露のような倉橋の至言を読者は毎月どれほど心待ちにしたことだろう。多いときには百六十ページ以上の厚さになった一九三〇年代には、〈倉橋の保育論〉のほか、〈海外視察記録〉や〈地方の実態報

告〉、〈研究論文〉、〈各種調査結果〉、〈保育案の実際解説〉、〈保育内容の事例〉などが満載で、全国の幼稚園教員のための学習教材として活用されたと思われる。

時代の変化と直接対峙する本質論の探究

戦後、同誌は幼児教育専門誌として、研究者と実践家が教育の本質論を戦わせ、時代の変化と真正面から向き合う真摯な姿勢が貫かれている。たとえば、「幼稚園教育振興計画」の発表と「幼稚園と保育所の関係について」の通達（一九六三）が出され、翌年の、「幼稚園教育要領」改訂告示を控えた第六十三巻では、新要領に対する識者の批判的見解や六領域（健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画制作）の実際の指導上における留意点が掲載されている。表紙には「幼児を交通事故から守りましょう」という標語が載るなど、高度経済成長を遂げ東京オリンピック開催に至る過程での子どもを取り巻

く生活の激変に対して、「子どものより良い育ちをどう保障していくか」読者の心に直接具体的に響き、問題意識を喚起できるような明解な主張が発信されていたといえる。

学際的子ども論の開花と啓蒙役割の終焉

ところで、一九八〇年代の「知のパラダイムの転換」と、「女性を取り巻く社会状況・産育意識の変化および女性学の台頭」は、啓蒙誌としての『幼児の教育』に方向転換を迫るものだったといえよう。

「未成熟で発達途上ゆえに教育と保護を必要とする子ども観」を前提とする幼児教育研究に対する自己批判は、従来の教育・発達心理・小児医学・児童福祉の枠組みを超えた子どもへのアプローチにより子どもの生を相対的にとらえ直す必要性を促し、誌面には学際的な子ども論が開花した。たとえば、森洋子のブリューゲルの子ども遊戯論や鬼頭宏の近世

の歴史人口学論などは、子どもの遊びや子どもの生死の意味について時空を超えて考える機会をもたらすものだった。

さて、この時期に、「性別役割規範」や「母性神話」への問題提起がされた結果、育児や教育の専門家の助言指導により女性を啓蒙する雑誌の使命が揺るがされた。実際、一九八〇年代後半より、一般の育児雑誌は読者参加型の誌面構成で部数を伸ばしたが、それは子育てに対する母親の不安や負担感を軽減することに重点を置いたもので、読者のニーズを先取りした実用的な情報と子育ての効率効果を優先するマニュアルに終始するものだった。その傾向は、残念ながら今や、教員養成の教材や現職者向けの指導書の一部にまで浸透してきている。

記録・内省による現場実践の質的向上の模索

そうした時代の安易な嗜好と対抗するように、近年

『幼児の教育』は保育の本質を探究する内省的な実践家たちの貴重な自己研鑽の場になってきている。

学問の専門分化が進み、教養が廃れ、市場原理の下で「知」が「情報」として消費され、啓蒙すべき対象もその確かな目的も喪失した今日、『幼児の教育』のような「啓蒙誌」の存在意義は認められにくいだらう。そんな厳しい状況において、優れた実践報告から実践家の今日の葛藤と改善への努力が率直に語られることは、質の高い明日の幼児教育の実現に必ずや寄与するものと確信する。

このように一世紀の間、常に時代の課題と真摯に向き合ってきた『幼児の教育』が、記事の電子情報化を機に孤高から解放され、同誌の精神を継承する共闘者と連携して「知」の新しい共同体を構築できるのか、歴史研究の活性化とあわせて、今後の展開に期待したい。

(子ども観の社会史・児童文化論・比較幼児教育学)